

メッセージアウトライン

ローマ9：6～18「あわれんでくださる神」

[6-7]「しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、『イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる』のだからです」

パウロはここで神のみことば、約束が無効になったのではないと言う。なぜならイスラエル民族がそのまま真の意味における神の民ではなく、イサクから出る者こそ、その子孫なのである。→創世記21:12 次節以下がその詳しい説明。

[8]「すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです」 「肉の子ども」とは人間的血縁関係にある子どものことであり、「約束の子ども」とは神の約束にもとづく子どものこと。それはただアブラハムから出たイシュマエルとイサクとの違いであるだけではなく、イスラエル民族と霊的イスラエルとの違いでもある。霊的イスラエルとはアブラハムが信仰をもって神を信じ神に従ったのと同様に、信仰をもって神に従う人々のこと。

[9]「約束のみことばはこうです。『私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。』」これは創世記18:10に記されていることばであり、神の約束である。この神の約束によってイサクが生まれた。このようにイスラエル民族を真の神の民としたのは神の約束であって血縁関係によるのではない。

[10-13]「このことだけではなく、私たちの父イサクひとりによってみごもったリベカのこともあります。その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行わないうちに、神の選びの計画の確かさが、行いにはよらず、召してくださる方によるようにと、『兄は弟に仕える』と彼女に告げられたのです。『わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ』と書いてあるとおりです」→創世記25:23、マラキ1:2-3

神の約束とともにもうひとつの重要な要素は神の選びである。それはイサクとその妻リベカから生まれたエサウとヤコブの問題にあらわされている。神はアブラハムに、イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれると約束された。それゆえその子どものエサウとヤコブの二人ともアブラハムの子孫、つまりイスラエルと呼ばれるようになって当然のはずであったが、実際はそうはならなかった。神は弟の、ヤコブを選び兄のエサウをしりぞけられた。しかもまだ彼らが生まれていない先から母リベカにそう告げられたのである。

[14-16]「それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません。神はモーセに、『わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ』と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです」

エサウとヤコブの側に原因や理由がないにもかかわらず、二人を差別するのは神が不正なことをしているのではないかとの疑問に対して、パウロは絶対にそんなことはないと言断言する。それは人間と神を同等の立場に置いた議論であって、神の主権性と絶対性に対立するものである。15節のことばは出エジプト33:19の引用であり、パウロはこのことば

によって神の主権的自由を教えている。神が人間に対して主権的自由によって行動されるということは、神が絶対者であることの当然の帰結である。このように選びが神の絶対性と主権性によるのであれば、それが人間の願いや努力によらないのもまた当然のこととなる。

[17]「聖書はパロに、『わたしがあなたを立てたのは、あなたにおいて私の力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである』と言っています」→出エジプト9:16

神はエジプトの王パロをひとつの目的のために選び、聖書の歴史に登場させた。それは彼が神の民イスラエルのエジプト脱出を強力に阻止しようとしたにもかかわらず、イスラエルが脱出に成功したことによって、神の力が現実の歴史において現され、神の名が全世界に告げ知らされるためであった。このことによって神はパロの心を自由に支配されただけでなく、すべての出来事を支配しておられるお方であることがわかるのである。

[18]「こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです」

すべてが神のみこころのままになされるのならば人間には何の責任もないのか。人が悪い人間となり、罪のうちに死んで、永遠の滅びに行くのも神のみこころか。このような疑問が当然わいてくるが神のみこころはそうではない。その詳しい説明は19節以下で述べられていく。

参考箇所：Ⅱペテロ3:9、ヘブル3:7~8、ヨハネ3:16、Ⅰテモテ2:4